



■フォトエッセイ■

スリランカの象

写真・文 荒井悦代
Etsuyo Arai

スリランカというと、思い浮かべるのは紅茶でしょうか。それともカレーでしょうか。これらの他にスリランカ旅行を彩ってくれるのが象です。数日の短い旅でも象に遭遇することは可能です。

実質的な首都であるコロンボと古都キャンデイを結ぶ幹線道路から少し離れたところにあるのが、ピンナワラです。ここを訪問するベストの時間は午前10時と午後2時です。なぜか。象の沐浴タイムだからです。象の沐浴？象遣いが象に水かけてごしごし洗うの？いいえ違います。数え切れないくらいに大小の象が川で思い思いに、自由に過ごしているのです（写真1、2、3）。

子象が親に甘えていたり、子象どうしがつき合っていたり、川に寝転んでいたり、一頭でのんびり鼻やしっぽをぶらぶらさせていたり、気ままな象をみながら川沿いでお茶を飲むだけなのですが、飽きません。動物園の猿山の前で長時間過ごしたことがある人なら理解してもらえるかもしれません。

川にやってくる光景もみものです。象の大部分が、手で触れられるくらいの目の前を通り過ぎます。象は意外なことにドシンドシと歩くわけではないのですが、やはりその大きさや重量感に圧倒されます。

川での沐浴が終わると、元来た道に戻って普段象たちが暮らしている地区に移動します。ほんの数メートルしか離れていないのに、こちらには広々とした空き地と山が広がっています。象たちに目を奪われていると、象遣いたちが「象



3 水浴び中の象たち



2 象の孤児院



5 ピンナワラの子象



4 居住区の様子

川と居住地区の間にお土産屋さんや並んでいます。ここでみるべきは「ぞうさんペーパー」でしょう。象は大食漢ですが、繊維質をあまり消化しないようです。象の歩いた後は「落とし物」が残されています。この落とし物を良く洗い加工して紙にしたのが、ぞうさんペーパーです。ちょっと分厚くてざらざらしていますが臭いはまったくありません。

シギリヤロックを訪れる機会があるなら、付近に一泊して象サファリもおすすめです。宿でジープとドライバーをレンタルして、夕方に出發します。広大な国立公園内を走り始めても動物の姿はなかなか発見できないのですが、運が

に触れ」「写真を撮ってやる」など声をかけてきます。こわごわ近づき、象にびったりくっつくようなツーショットの写真が撮れます(数百円程度のチップを要求されます)(写真4)。

別の東屋には子象がつかない大きいです。ここでも大きな犬くらいの大きさです。ここではミルクをあげることができます。象の口に五〇〇ミリぐらいの瓶をあてがうのですが、象は一気に飲み干してしまうので、シャッターの準備が必要です(写真5、6)。

ピンナワラは象の孤児院となっており、ジャングルで親とはぐれてしまった象などがここに引き取られます。内戦中に地雷で足を怪我した痛々しい子もいます(写真7)。ただ、大人になっても、ジャングルに戻されることはなく、ここで暮らすようです。ウダワラヴェにも象の孤児院がありますが、こちらは子象のみが保護されています。



7 象の孤児院に住む地雷で足を失った象(中央)



6 ミルクを飲む子象

よほど悪くなければしばらく走ると象はみられません。それも、牧場に牛がいるように象が群れになっていきます。象をみるなら望遠鏡は不要です。象は十分大きいし、ドライバーがジープで安全な距離まで接近してくれます。時々、機嫌の悪い親象がいますが、そのときはドライバーが全速力で逃げてくれます。それ以外の象たちはタンクと呼ばれる貯水湖のあたりで夕日を浴びながらのんびりしています(写真8、9)。

スリランカのお祭りには象は欠かせません。特に大規模なのが八月に行われるペラヘラ祭りで、象の行進はめぐるめく一大ページェントです。象が有り難いご神体を運ぶのですが、全国から集まった一〇〇頭以上の象が電飾を施した布をまとい練り歩くのです。その前後には趣向を凝らした出し物やダンスを披露する人々が延々と続きます(写真10)。

国立公園に行く時間がない場合でも時々ですが移動中に象に出くわすことがあります(写真11)。働く象や幹線道路を横切る象です。象の多く生息する地域を夜間に運転する場合は要注意です。それだけスリランカでは象は身近な存在です。

ただ、いいことばかりではありません。野生の象と人間の間に問題もあるようです。農民たちは象に農作物が食い荒らされるため、夜は畑に小屋を作って寝泊まりします(写真12)。ロバート・ノックスの『セイロン島誌』には、村人どうしのトラブルの際、喧嘩相手の家の四隅に塩の山を盛っておく、すると塩を舐めに来た野生の象が喧嘩相手の家を壊してしまうなどと



9 象サファリの様子



8 象サファリ



11 トラックで運ばれる象



12 見張り小屋



10 ペラヘラの象

いう、象の特性を利用した嫌がらせ方法が紹介されています。現在、野生動物保護局はトラブルを起こす象を別の土地に移動させることで問題を解決しようとしています。象が元いた土地に戻ってしまう例がしばしば報告されています。象とのトラブルで年間平均(二〇〇五〜一〇年)七〇人が亡くなりました。野生動物保護局は二〇一一年に象被害を受けた人々に二五〇〇万ルピーの補償金を支払いました。象は身近な存在であり、ペラヘラでは欠かせない存在であり、保護すべき対象でありながらその身体の大きさや強さから、恐れるべき対象でもあり、同時に管理すべき対象でもあったのですが、近年は象に対する人間の悪行が報告されています。

スリランカでは野生の象の捕獲は禁止されています。お寺などが宗教行事のために象が必要な場合、ピンナワラ象の孤児院からある程度大きくなった象をもらい受け、動物局へ登録することとなっています。象を所有することは、名誉なことであるもののいくら子象でもえさ代がかかりますし、大きな負担を覚悟しなければなりません。そのため象の飼育に関しては様々な制約があったにもかかわらず、近年、子象を飼育する個人が増加したのです。調べてみると登録書は偽造されたものでした。そして象は密猟されてきたものでした。

象を密猟者から買い、ペットのように飼うことがお金持ちの間でちょっとしたブームになっていたのです。確かに子象はかわいいですが、しかし、象は五才くらいまで群れの中で母親に守られながら生活する動物で、群れから迷ってピンナワラに保護されたとしても四〇%が死んでしまうのです。お寺などはペラヘラで必要だから飼育するのは当然、と主張していますが、個人で飼育するのは、象にとって不幸ではないでしょうか。

あらい えつよ/アジア経済研究所 動向分析研究グループ

1990年入所。1994～96年キャンディ在住、2008～10年コロンボ在住。スリランカの政治・経済を担当。

近年になりようやく、密猟や違法な飼育への取り締まりが強化されるようになりました。スリランカでは象と人間の共存が模索されています。